

1 紅旗征戎非吾事 VI

2
3 そもそも全体主義（fascism）が、いったい何を目的として、どんな国を実現しようとして
4 いたのかがわからない。多分、右翼（保守）でもなく、左翼（革新）でもない。ファッシ
5 ヨの語源は、木の束だから、様々な利害を持つ人々を束ねるの意味だろう。政治的用語と
6 しては、国民で構成される国民国家（近代国家？）で、立場・意見の違う「国民を束ね
7 る」の意味だろう。もし初めから、国民が同じ意見ならば、わざわざそれを束ねる必要は
8 ない。反対に、意見が違う様々な人がいた場合、これらを全部束ねることに意味がな
9 い。束ねた集団の中に違う意見があるのだから、これを調整しなければならず、束ねても
10 束ねなくても同じことになる。だから、おそらく、ある範囲内の意見を持つ人間で、多数
11 派を構成して、これを束ねて、自分たちを「俺たち」として、そうでない人間を、「あいつ
12 ら」として、敵視するということだと思う。そうすると、誰を切り捨てて、誰を仲間とす
13 るのかという問題になる。とりあえずは、最大公約数的な、中間的な多数派が、「俺たち」
14 になることが多く、その意見分布の外側が、「あいつら」ということなることが多いと
15 思う。例えば、日本の大政翼賛会も、一国一党のような、独裁体制を目指したのらしいの
16 だが、いろいろな政党が、付和雷同的に大政翼賛会に入ってきてしまって、何がなんだか
17 わからなくなって、その結成時には、綱領も宣言もまとまらなかった。この辺りは、実に
18 日本人的で、大政翼賛会さえまともに作れなかったと言われたみたいで、ちょっと情けな
19 い。日本人は原理原則的に、切り分けるのが苦手だ。まあしかし、いつでも原理原則的で
20 論理的な方が良いということでもないから、まあ、仕方ない。話をドイツに戻す。

21 一致団結して何かを目指すという姿勢は、積極的な姿勢である。貧困状態では、積極的に
22 何かをするという意味を持ちにくいし、自分たちの可能性を信じて積極的な姿勢をとると
23 いうことはまずない。しかし、ある程度、経済的に成功してくると、何かをしようとする
24 意思が出てくる。そうすると、異論を排除して、積極的に何かをサッサとやりたくなる。
25 こういう時は、国民一致団結して、ある方向を目指すというのは、受け入れられやすい主
26 張になる。その場合、議論をあまり細かい違いのところを持ち込まないほうが良い。細部
27 についての意見の違いは必ずあるから、そこを突っ込まずに、大枠賛成みたいにして、あ
28 とは、現場、あるいは、専門家の判断でやるという風に合意してしまうのがコツだ。だか
29 ら、何をするかということも、曖昧な方が良い。自分たちの国を豊かにするとか他の国に
30 侮られない大国にするとか、とにかく、みんなが賛成せざるを得ない、よくわからない目
31 標にしておくほうが良い。実際には、どうそれを実現するかが問題なのだが、それは、専
32 門家（建前としては、官僚、軍隊、技術者等々）に任せとしておけばよい。もう一つ、自
33 分たちに対する「あいつら」を作らなくてはならないが、これは結構難しい。幸い、ドイ
34 ツには、というか、世界中にユダヤ人がいる。アーリア人として、未来が約束されたドイ
35 ツ人を、妨害するのはユダヤ人だ。もう一つ、おおむね同じような方向を向いているのだ
36 が、細部においてはっきり違う。つまり、自分と意見が近いのだが、はっきり違うとい

37 う人々も、「あいつら」となる。大衆の支持がそちらに傾いてしまう可能性があるので、
38 だ。官僚任せで、経済を動かすという発想だと、社会主義経済のような計画経済・統制経
39 済になる。似たような政策になるので、排除する必要があるのでは、共産党も「あいつら」
40 になる。こちらは、政策的に似ているからである。

41
42 これは、全体主義を立ち上げる時の要領のようなものなので、その前に、皆でなにかをす
43 るという考え方がどうして出てくるのかを考える。この、皆であるべき方向に向かうとい
44 う。哲学というか、なんというのかよくわからないが、社会があらかじめ決められた方向
45 に向かって変化していくという考え方を、社会進化論という（私が勝手にそう思っている
46 のかもしれないけど）。ネットで、社会進化論について調べると、ハーバート・スペンサ
47 ー(1820-1903)が、社会進化論を提唱したという解説が出てくる。進化論という学問分野
48 の研究史考えると、確かにそれはそうなのだが、社会進化論を最初に考えたのは、ハーバ
49 ート・スペンサーではないと私は思う。社会進化論を社会ダーウィニズムということがあ
50 り、実際、スペンサーは、種の起源を読んで、それを参考にしたと言っているが、社会が
51 時間とともに変化してきたということは、歴史を学べばだれにでもすぐにわかる。また、
52 自分の生きていた時代を振り返っても、社会は時間とともに変化するものだということに
53 納得するだろう。だが、この社会進化論という考え方は、偶発的な変異が蓄積されて、未
54 知のもの変化していくという、ダーウィンのような考え方でなくて、何らかの法則によっ
55 て、定められた方向に向かって、社会が変化して、やがてどこかにたどり着くという発想
56 なのだ。そういう発想、つまり、歴史に一定の方向性があるという考えは古来珍しくな
57 い。ユダヤ教の、ユダヤ人が最後に祝福さえるというのも社会進化論だし、最後の審判に
58 向かって、世の中が進んでいくというのも社会進化論だ。だから、社会進化論は、そこら
59 中にあるのだが、近代になって社会進化論的なもの考え方をした人の代表はヘーゲル
60 (ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル :1770-1831)とマルクス(カール・
61 マルクス :1818-1883)だろう。彼らの思想を、社会進化論として分析したり、説明したりし
62 た文章は読んだことがないのだが。私は、これらをひっくめて、社会進化論だと理解し
63 た方が、わかりやすいと思っている。ヘーゲルによれば、歴史(社会進化)の方向の先に
64 あるのは自由であり、人間の理性が世界をコントロールすることなのだが、その感覚は、
65 近代の科学の発達を背景にしている魅力的だ。進化論では、進化のメカニズム、動力のよ
66 うなもの説明が必要だが、ヘーゲルの社会進化論の中では、それは弁証法だ。ヘーゲル
67 の弁証法は、テーゼがあって、アンチテーゼがあって、アウフヘーベンして、ジンテー
68 ゼ、それが次のテーゼになるというやつで、これで説明終わりなのだが、なんのこっちゃ
69 かわからない。具体的に言うと、例えば科学の場合、ある説(テーゼ)があって、その説
70 の矛盾を突く(アンチテーゼ)があって、それらを比較・検討して、合理的に整理して
71 (アウフヘーベン)、次の仮説が生まれて(ジンテーゼ)やがてそれが定説化する(次の
72 テーゼ)という形で、無限に真理に使っていくという考え方で、漸進的に真理に近づい

73 ていくという点で、科学の経験的認識という考え方に似ている。ヘーゲルは、歴史もこの
74 メカニズムで変化してきたのだと考えた。彼にとっては、変化するものは、人々の自由
75 だ。この辺り、いかにも、近代の市民社会形成期にふさわしい考え方だ。彼の歴史感で
76 は、中国やペルシャの古代王朝のようなものがある、そこでは皇帝だけが自由なのだ
77 が、ローマ帝国になると、貴族が出現してきて、貴族階級が自由で、奴隷は不自由だ。西
78 ローマ帝国が減って、絶対王政の封建制になると、それぞれの国の皇帝が自由で、その他
79 は不自由になるのだが、フランス革命のような市民革命がおこると、市民が自由になる。
80 そのようなプロセスで、最終的にすべての人々が自由になるという、歴史感なのだ。超楽
81 観的だが、これはまあ、わからない考え方ではない。しかし、彼の歴史感の時間軸は少し
82 面白くて、時間というよりは、空間的な感覚で、おおよそ東洋から西洋という流れになっ
83 ている。「歴史哲学講義」(1838)は、ヘーゲルが、ベルリン大学で1822-1831年に行っ
84 た、「世界史の哲学」という講義の内容を、彼の死後、弟子たちがまとめたものである。
85 当然、私は読んだことがない。正しくは、読めない。まあ、目次程度はわかるから、その
86 あたりの知識で要約すると、まず、古代東洋(中国、インド、ペルシャ、ユダヤ、エジプ
87 ト)と、ギリシャ・ローマを中心としたヨーロッパを比較して、東洋を人間の自由という
88 意味では停滞的であるとして、その意味で、人々の自由を開放していったのは、ギリシ
89 ャ・ローマに始まるヨーロッパだとする。そして、市民革命を経て、絶対精神と一体化し
90 た個人の自由がドイツの市民社会で実現するとした。絶対精神と一体化した人格というの
91 がどういうものかわからないが、とにかくそういうものらしい。何を言っているのか、わ
92 からないが、そういうもの(歴史の到達点)が、最終的にドイツで実現するということ
93 だ。そこは、わかった。しかし、なんで、それで終わりになるのか、よくわからない。と
94 にかく壮大なハッピーエンドで、話を盛り上げて話を終わる必要があったのだろう。多分
95 そういう演出なのだ。そんな、演出がなくても、ヘーゲルの言っていることは、賛否はと
96 もかくとしてわかるし、それだけで、十分スケール感のある、大哲学だ。何も、そんな大
97 げさなエンディングなど不要だろう。私は凡人だからよくわからないが、大学者というの
98 は、それだけ話を盛り上げないと居られないのかもしれない。何故、それが、ドイツで実
99 現するのもよくわからないが、講義したのがベルリン大学で、プロイセンに招かれてベ
100 ルリン大学の学長をやっていたわけだから、とりあえず、ご当地を持ち上げておく必要が
101 あったのかもしれない。大学の講義も、一種の興行のようなものだから、ご当地に感謝し
102 て、未来が約束されていると持ち上げておいたというのはいささかありそう。相撲の巡業だっ
103 て、巡業先のご当地を、ちゃんと持ち上げる。そういうことなら、相撲甚句も、ヘーゲル
104 さんも、ご当地びいきが、世のならい。ハー、ドスコイ、ドスコイ(ちゃんと、7、7、
105 7、5で、甚句になっているところを、頑張りました。)

106

107 参考、相撲甚句「当地興行」

108 ハー、ドスコイ、ドスコイ

109
110 ハァーエー
111 当地興行も 本日限り ヨー
112 ハー、ドスコイ、ドスコイ
113
114 ハァー 観進元 や 世話人衆
115 お集まりなる 皆様よ
116 ハー、ドスコイ、ドスコイ
117
118 いろいろお 世話に になりました
119 お名残惜 しゅうは 候(そうら)えど
120 今日はお別れ せにやならぬ
121 我々発 ったる その後も
122 お家繁盛 町繁盛
123 悪い病(やまい)の 流行らぬよう
124 陰からお 祈り いたします
125 これから 我々 一行も
126 しばらく 地方ば 巡業して
127 晴れの 場所にて 出世して
128 またのご 縁が あったなら
129 再び当地に 参ります
130 その時や これに 勝利し ご臍原を
131 どうか ひとえに ヨーホホホイ
132 ハァー 願います ヨー
133
134 ハー、ドスコイ、ドスコイ

135
136 もう一人の、マルクス だが、こちらの 方は、言わずと 知れた、弁証法的唯物論 なのだが、
137 これも、わかったようで、わからないところがあって、いろいろな 解説を読むと、ますま
138 すよくわからなくなる。まあとにかく、世の中の構成要素を、上部構造(文化、思想、法
139 律、政治等々、物質的でない 観念的 なもの)と 下部構造(農地、工場、機械、道具 などの
140 生産手段 と、労働者 と資本家 の関係、所有、配分 などの 生産)に分けて、下部構造によっ
141 て、上部構造 が決まると 考えて、下部構造 の変化によって、歴史 が作り出されてきたと 考
142 える 進化論 だと、ものすごく 単純化 しておく。これで、唯物論的 な進化論 だという 説明は
143 出来たが、弁証法 の方はどう 説明 するのかという 問題があるが、こっちの 方は、まあ、下
144 部構造 の変化によって、上部構造 ができたとしても、どうしてかわからないけれど、それ

145 を否定する意見というか階層というか、そういうものができて、その間で、闘争が起き
146 て、それが最適化して、とりあえず、次の段階に進むという、ヘーゲルの弁証法的なメカ
147 ニズムなのだと思う。なんだか知らないけれど、否定するものが出てくるところ
148 は、ダーウィンの進化論っぽいところもある。ただ、ダーウィンの進化論は進化の方向につ
149 いては何も言っていないのだが、マルクス的進化論は、進化が進んでいく方向がある。
150 彼が描く歴史は、原始共産制（平等な社会）→生産性が上がって富める者と貧しい者の違
151 いができた社会（市民-奴隷）→封建社会（貴族-市民）→資本主義社会（資本家-労働
152 者）→共産主義社会（平等）という流れの歴史になっている。各段階で、その制度が行き
153 詰まると、革命があって、次の段階へ進む。最後の共産主義社会のところは、観察された
154 事実ではなくて、彼の予想ということになる。多分、彼はそうなると思ったのだろう。お
155 そらく、そうなるべきだと言ったのではないと思う。そこんところは、良くわからない
156 が、多分、無茶苦茶詳しい人はいると思う。ただ、「あて物と越中ふんどしは、向こうか
157 ら外れる。」というから、そうなるかどうかはわからない。

158

159 長かったけど、ヒトラー率いるナチスが、ドイツにおいて、指示された背景を整理すると
160 以上ようになる。当時の知識人・文化人だって、大方の人は、その方向性はともかく
161 も、決定論的進化論を信じていて、それに、国民国家という建前が加わると、皆でその方
162 向へ、努力しなければならないと、思ってしまっただろう。特にクリスチャンはそういう
163 発想に弱い。クリスチャンは無神論者ではない（当たり前だ。）。だから、歴史にそういう
164 社会背景があっあらかじめ決まっている方向性などないという、無神論的発想を持ってな
165 い。西洋人が、無神論を恐れるのはそういう理由だ。この感覚は、日本人にはわかりにく
166 い。ドイツの人がヒトラーを信じたのは、ヒトラーの演説がとてもうまかったからだとい
167 う説明は、納得がいく説明ではない。彼の演説を見てみたが（聞いてみたのではない、ド
168 イツ語分らないから、聞いても意味ない。）、比較的、静かに、小さな身振りで、話始
169 め、少しずつ大きな声になって、身振りが付き始める。最後は、大きく手を振って、絶叫
170 調になるという、ありそうな演出で、あらかじめフリをつけられていることがわかる。あ
171 のやり方で、異なる意見の人を、納得させることは出来ない。意見の異なる人の前で、あ
172 んな身振りで話す奴は、頭がおかしいとしか思われかねない。彼の演出が成り立つのは、
173 初めから、聴衆が彼に同調しているからだ。つまり、聴衆は、初めから、国民が束ねられ
174 て、一致してどちらかに進むという考え方を受け入れているのだ。おそらくそれは、不況
175 の波を乗り越えて、経済的に発展し始めたという自覚と、新たに生み出されてくる「科
176 学」の情報に乗り遅れまいという思いと、無神論的発想に耐えられないという、キリスト
177 教徒的制約の葛藤もある。そのあたりを、都合よくつまみ食いして、作られたジャーナリ
178 ズムの扇動に乗ったためだろう。

179 ジャーナリズムにあおられた、「正義」による大衆の政治参加は、時には、扇動した人た
180 ちさえ制御不能になる。大衆は、何もそこまで、ジャーナリストを喜ばせる必要はない。

181 ジャーナリズム におおられて、 積極的 に政治 に参加 していくことが、 結構、危 ないことな
182 のだということは、わかっただろうか。
183